

夢のハツカ

高橋将夫

誕生も死も暖かく見守らる
煩惱を生きる力に春田打
花疲れして欲得もなく眠る
種蒔くや望みはしても期待せず

時期が来て雪も誤解も解けにけり
会心の笑みを浮かべる大石忌
春の夜の黒の漆のよく延びる
春の夢にもハツカーが侵入す
良寛忌寿命伸びたり縮んだり
接木でも挿し木でもよし残るなら
一切は種一粒の中にある

槐安集

水野恒彦

涅槃変われなぬいろの星が飛ぶ
鶴唳を残して鶴は北へ去る
枯蠟螂虚空の何か見つめをり
父逝きし二月の山河茫茫と
底しれず降り積む雪の実朝忌

延広禎一

北開き遊戯の器の轆轤挽く
黄蘗色は祈りの色よ紙漉ける
海底林のゆらぎし真上蜃氣楼
露の臺歌劇の街のふところに
大津絵の手拭首に雛飾る



加藤みき

森の芥浮く満満の春の水
大千潟半旗ちぎれんばかり揺れ
寒明けや裳裾にひとつ泥はねて
春暁や雲の中から人のこゑ
茎立や翁おきなは此度も第一席

石脇みはる

春一番生命あるもの動き出す
流れ藻の色さみどりに春の川
桃の花雲はいづこへ行つたやら
上海の綾香香純の雛かな
板橋の上かみより流し雛かな

中島陽華

たつぷりと大阪に寝ね初鴉
呉竹の二月礼者や芝翫下駄
立春の細き男と鯛でんぶ
ベルツ水具しひようひようと大枯野
春分のサンバを踊る産婆かな

竹内悦子

石塊に佛の心石路の花
佗助や茶袱台に置く墨硯
西行忌袖着てゆく女かな
いろがみの裏みな白し鳥交む
実南天真白大日如来かな

栗栖恵通子

山本作兵衛
炭坑の絵に四季の別なき虎落笛
千枚の記憶画一握の春の雪
ひたすらに秒針ひたむきに春の雪
まん中の鼻をいらふて春の昼
レグルスの心臓明き春の雷

大島翠木

筭や母の天折冬銀河
うすらひの割れしは無常迅速なり
空海の井より湧き出す雪女
夜の梅眉根さやかにデスマスク
六十四年遂に一人や春の雪

雨村敏子

初午や龍神祝詞のこゑ揃ふ
星空へ闕伽桶に張る春氷
聲明や掬ひし水の冴返る
福は内二回鬼は外一回
てのひらに、と書きぬたり厄おとす

本多俊子

絶頂といふさびしきもの冬ぼたん
言霊とならざる咳をこぼしけり
何せむと春寒の朝の正座かな
薄氷に表と裏のありにけり
チューリップ希望の色が立つてゐる

近藤きくえ

合掌にはじまる朝お元日
点滴のひと雫なり寒の星
寒の月すべての治療つくせしと
ただそこにゐて欲しいのみ春灯
天地に皆に感謝や春きたる

近藤喜子

山彦のひとこゑ春の動きけり
うすらひに寄り添ふ思春期のこころ
人の世を抜け梅林の風となる
中空の黄ばみてゐたる涅槃かな
九天の晴れわたりたる出開帳

谷村幸子

この春や無事の朝夕手を合はす
早蕨や星田妙見織女石
雲きれて山の南の水菜畑
枯芝に人が憩ひて三笠山
梅咲いてぬりこべ地蔵に子のつどふ

瀬川公馨

凍て凍てて天地のあはひなかりけり
雨音の何だか春の予感せり
海老芋の八角鉢の金欄手
しろつばき鳥の子紙を結びたる
ひとひらひとひら雪片^{ひとひら}落ちてくる

久保東海司

溪流の風噴きあげて梅にほふ
蟪蛄の緑を余し枯れ切れず
戒めの言葉のありて初曆
潮騒や早き芽吹きの水仙郷
連れあひと潜りくらべの鯨かな

西村純太

梅いちりん数珠につらなる宿世かな
道化師の化粧の紅の余寒かな
如月の昏れて摂津の弱法師
梅が香や無明の眠り覚めやらす
朧てふ影と語りぬいのちかな

中野京子

生るる今流るる今の春隣
八百万を写して温む水鏡
絶対はひとひら舞へる春の雪
天つ日の空のスカーフ春の虹
三色はおのが色なるすみれかな



槐市集

有松洋子

立春や塔より鳩の飛び立てる
早春の小さき画廊の小さき展
春光のただよふあたり君の立つ
吾が手足少しく伸びて春めける
夜に咲く椿を剪つて会ひにゆく

犬塚芳子

農に生きひと日暮れたり種袋
春耕の烏と三メートルの距離
奴胤齡の綱を伸しをり
神の前おのが魂梅三分
折紙にこめる齡の雛かな

犬塚李里子

コロンの香残して行きぬ寒の明
春星や地霊と交はすテレパシー
日輪を零す雪解のしづくかな
百蕾の息潜ませて春の雪
黄水仙の精に癒さるる傷心

井上静子

おでん煮る利尻昆布や濤聞こゆ
魂を込めたる筆先冬銀河
雛飾る嫁ぐ娘の手の御所車
旅の湯のつき合ひあらた春隣
耳朶の左右がちがふ春愁



槐集

高橋将夫選

竹林に兔の灯す豆ランプ 枚方 熊川 暁子

氷像の日を集めをり放ちをり

目葉を注すや九天春隣

寒の月眼ちぢまる沖のあり

寒林を過ぎて人間臭さぬけ

行けばあることのうれしさ春の海 守口 柳川 晋

忘却は浄めの流沙蘂ゆる

流し雛ひとつにも帰りたき処

立春大吉アンパンカレーパンメロンパン

どつかりと山笑ふまで睨めつこ

春北風や野山の匂ひビル抜けて 京都 竹中 一花

荒行の肌の赫さよ鸞の谷

掌に春の冷たさ豆を炒る

小町忌や六波羅密寺に空也像

春シヨール^{もろ}武士^{ぶし}の道踏みゆけり

みしみしと雪の怪かし通りたる 摂津 中田 禎子

アイゼンの二つでひとつ尾根光る

雪衣まとふ天女の楊かな

激流の果ては海原桜鯛

春昼やねこふんじやつた途切れがち

凍解や桃色の世の明けて来し 岡崎 岩月優美子

魚は氷に上りワルツとブルースと

凍返る夜の耳感じ易きかな

人はみな天空に夢追ひて春

楽園を求め海市の涯かな

白紙に黒髪束ね梅の巫女 守口 岩下 芳子

縫目なき天の羽衣春衣

三角に折つて畳んで紙雛

梅園の大气の中の土不踏

じやぶじやぶじやぶ遡りたる春の川

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

水像の日を集めをり放ちをり 熊川 暁子
太陽を浴びて水の像がまぶしく輝いている景。冬の日を吸収している側面と光を反射している両面から水像を捉えている。景の美しさに感わされず、このように客観的に捉えることが出来る作者の目の確かさに感心させられた。

〈寒林を過ぎて人間臭さぬけ〉の句もまた作者の眼力の確かさを証明している。寒林を通ると確かに心が洗われた気になる。〈竹林に兎の灯す豆ランプ〉の句は一転してメルヘンの世界へと誘つ。豊かな感性と思ふ。

行けばあることのうれしさ春の海 柳川 晋
当然あると思つて行つたら、もうそこには無かつた。いつものように会えると思つて行つたら、もうそこには居なかつた。今日あることは明日もあると思うから安心して暮らせるが、そうならないことも多い。一期一会である。しかし、春の海は期待を裏切らない。いつもそこにある。この当り前がうれしいのである。

〈流し雛ひとにも帰りたき処〉…この雛はどこへ流れていくのだろうか。どこへ帰つてゆくのだろうか。そういえば、自分の帰るところはどこなのだろうか。流し雛の姿が自分に重なる。確かに、人はみな心のふるさと持っているのだ。

〈忘却は浄めの流沙襲ゆる〉の句だが、忘れるから次が襲えることは確かである。〈どつかりと山笑ふまで睨めつ〉の句では季語の使い方に感心させられた。

春北風や野山の匂ひビル抜けて 竹中 一花

ビル街を風が吹き抜けてゆく乾いた景であるが、その風に野山の匂が感じられたということで、潤いのある景になった。

〈小町忌や六波羅密寺に空也像〉〈春シヨールと武士の道みゆけり〉の句では、「小町忌と空也像」「春シヨールと武士の道」の取り合わせが絶妙である。〈掌に春の冷たさ豆を炒る〉の句のこまやかな感性も素晴らしいと思う。「春の冷たさ」が浅春にぴったり。

アイゼンの二つでひとつ尾根光る 中田 禎子

アイゼンは両足分が揃つて初めて用を成す。二つ揃つて一人前である。そういうものは他にも沢山あるが、アイゼンは命にかかわるといふ意味ではそれらの代表といつていいだろう。当り前とは言いながら、誰も言わなかつたことで、その目のつけどころには脱帽する他はない。ものの本質とはそんなものだ。

魚は氷に上りワルツとブルースと 岩月優美子

氷に上つた魚が軽快なワルツもムードのあるブルースも滑られるよと言っているようで愉快である。古典的な季語をうまく活用している。

白紙に黒髪束ね梅の巫女 岩下 芳子

梅の花のもとに白紙で黒髪を束ねた巫女が居る。美しさが匂い立つ景といえる。(以下略)